

2016. 2. 29

現代俳句千葉

120号

大畑会長のご逝去を悼む

千葉県現代俳句協会会長代行 秋尾 敏

まことに残念なことである。大畑会長がお亡くなりになった。未だ心も収まらず言葉もまとまらない。訃報を受けたのは一月十日のことであった。前日には幕張に四人の副会長が集まり、会長ご退院までの運営を話し合ったばかりだったのである。享年六十五歳。私と同年代である。早過ぎるご逝去で、ご家族のお気持ちを察すると胸が痛む。

大畑会長は、昭和末期から「麦」代表の田沼文雄さんのもとで本格的に俳句を始められた。十分力を付けられた後、平成十年に現代俳句協会に入会。千葉県現代俳句協会の津田沼研究句会で頭角を現し、幹事となつて編集長、事務局長などの要職に就かれた。途中舌癌に罹患されたりもしたが奇跡的に回復。塩野谷仁さんが創刊された『遊牧』に参加し、句作の実績を積まれた。平成十四年には八木三日女を論じて第二十一回現代俳句協会評論賞を受賞し、実作、評論ともに一流の実力者であることを示された。平成二十一年には句集『ねじ式』を刊

行。俳句の新しい領域を切り拓く筋の通った句集であった。さらに会長は、本部の役員も引き受け、大車輪の活躍を続けられた。その働きぶりには比類のないもので、そこには大病を乗り越えた人の、生きることへの覚悟があつたように思う。

現代俳句協会に対する大畑会長の貢献の大きさは計り知れない。本部の副幹事長でIT推進部長。そこに千葉県現代俳句協会会長であつたのだから、どれほどの仕事量であつたかと思う。誰も大畑会長不在の空白を埋めることはできない。

だが、私たちは、大畑会長の遺志を思い、この千葉県現代俳句協会を維持し、発展させていかねばならない。そのためには、会員の力を今以上に結集することが必要である。どうか今一度協会の存在意義を考え、活動の質を高める工夫をして頂きたい。それが、協会の発展に寄与し続けた大畑会長の思いに報いることであると思う。

目次

大畑会長のご逝去を悼む 秋尾 敏	1
大畑さんありがとう	2
諸家近詠	3~5
私の感銘句	6~10
津田沼研究句会報告	11
青葉研究句会報告	12
柏研究句会報告	12~13
新会員・会友紹介 ひろば 図書紹介	13
会員・会友の近況	13~14
掲示板	14

大畑さんありがとう

ゆつくり

お休みください

冬の雷うしろ姿を見失う

久野 康子

冬蝶の太き涙となる日暮

清水 伶

私のなかで白いさくらになって逝く

小林 実

強靱さ細やかさ雪ふりやまず

高橋 宗史

紀の海に還りて鯨追う君か

高木 一恵

眠る山動かし何故に君逝くか

直江 裕子

雪の日のゴーヤテラスや紫煙たつ

イザベル真央

一月の絶景に鷹見失う

菊地 京子

慟哭の跳ばす鍵盤紀伊の空

松澤 龍一

人逝きて船橋地方雪くるか

塩野谷 仁

寒月の銀河鉄道たばこ持ったか

細野 一敏

荒星や大きな笑顔熱血漢

大塚 弘毅

さびし寒しはや銀漢を渡りしか

伊藤 希眸

他界にて健筆揮ふ鬼才かな

小出 治重

大畑を耕す人の影ながし

武田 和郎

凍星や一俳諧師としてゆけり

檜垣 梧棲

彼の世にも等しく春の灯を点す

吉野 精

永遠の冬星ねじは燻し銀

小林 俊子

共鳴りの滅ぶことなき寒昂

小野 功

冬落暉大畑等早過ぎる

東 國人

句に流る肝の太きよ恵方道

小高 総

水鳥の一方的な別れかな

横須賀洋子

悼みかな寒梅の芯青くして

星野 一恵

前の世へ御魂ひきよせ風花す

小張 直子

今ごろは銀河鉄道どのあたり

楠見 恵子

嗚呼愛しも寒月光はシンプル

山中 葛子

極上の笑顔遺して鳥帰る

齊藤すず子

大いなる夕日の沈む冬菜畑

高橋 健文

完璧を抜けて火急の冬の旅

長濱 聰子

にこにこ特大級の冬太陽

森村 文子

冬帽子煙草とやうて逝きしまま

山崎 幸子

雪折れの音一心に祈るとき

内田 庵茂

根っからの海の男よ懐手

徳吉洋二郎

ひとし逝く菘爛酒置いてゆく

矢野 忠男

ねじ式で言霊緩む旅路かな

林 阿愚林

麦踏みし背巨きかり茜雲

三苫 知夫

ねじ式の螺子が失せたる初戎

興津 恭子

真夜の風一寒燈を揺らしけり

野口 京子

残響に酔うはかなしや冬の星

高桑婦美子

やわらかき心横とう雪男

渡辺 礼子

暮れ残る五重の塔や寒鴉

中村 棹舟

寒夜更ける紀の国の句の深遠

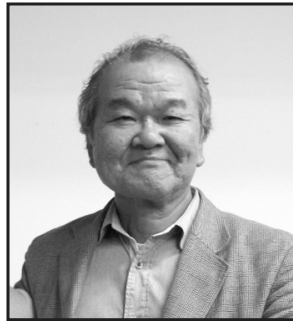
なかもと淑子

冬薔薇息することを忘れけり

白木 暢子

ひとひらの風花が舞う補陀落山

木之下みゆき



諸家近歌

自販機の影歩み去る秋の暮

藤田 守啓

ニッポンはいよいよ危うし憂国忌

愛猫はリリー愛人など要らぬ

スペインで客死夏帽かぶりしまま

渤海を遡りたる金魚かな

松澤 龍一

城を曳く大宰の空がぐらりぐらり

鳥絞める妻ハイドンを聴く夫

古都残映辻に遭ふカフカの眼

現し世へ体液と云ふ落し物

あしびきの山田金物店 夕日

宮下 奈緒

花嫁をかこむ二次会花の雲

老鶯の追ひかけて鳴くイロハ坂

優しさは風に染まりし草蓑

長男の文字のはみ出す星祀り

ねんねこや使はずにある井戸ポンプ

実糊 繁

新しみ心の鈍化初日影

蕉風に松と竹あり初句会

肝胆を照らし合う者無き寒月

船上に人冬闇の包囲網

冬薔薇に宇宙の匂いらしきもの

元橋 孝之

凧にないしよばなしを攫はれる

東風きざす故知をわするな大津波

のめりこむほど視野せまく靄の蝶

彼の世よりすがたあらはす夏の蝶

桜紅葉あとを追ふてはなりませぬ

炎天より敗残兵のごと帰宅

敬老の日に反戦を兜太吠ゆ

無法松のごと走りたし運動会

ユニクロで衝動買ひせし十二月

悪友の護憲派と知る年賀状

松本 静顕

老鶯や採石場の昼休み

夏帽子只管登る男坂

水打つや石に貌あり声のあり

野仏の膝を寄る辺に枯蟻螂

晩年の余白めく日の日向ぼこ

森 孝子

法師蟬父上二十七回忌

結局はひとりの帰路や秋の風

卓上にどんぐり置いてリラックス

「ムーンライトセレナーデ」聞きある夜長

盆過ぎの墓の墓守優しかり

増田 豊子

戦前の亀のごとくに生きて冬

京都から白い人来る冬が来る

鬼火ともみちのくははるかに暮れて

ビードロのうすくらがり冬の寒さかな

もとよりの言語道断空つ風

山崎 聰

くるぶしを入れて忽ち大干潟

遠国のラジオのノイズ夜の金魚

原爆忌何することもない蛇口

踏台にのぼって下りる秋の暮

菴の中まで百代の枯野道

門谷 杜人

冬うらら誰も孤独を口にせず

ゴムまりのような童女と枯野行く

山茶花やはなやかに散る村はずれ

初明り晨光集め宙展く

人力車ぐいと新車滑り出す

柳沢 純

神々は十二三人野分過ぐ

冬桜のこざりやまの南側

そのへんで遊んでいます赤い金魚

一生を夢の中にて赤い金魚

黄落の街はルーベで覗くべし

森村 文子

初詣足どり確とみどりこよ

人恋の歌留多より覚む夫よかり

岩櫃山の風にひび割れ鏡餅

秋澄みて白砂声吸ふ大河かな

花芒鉄橋高き川の黙

山口 梅子

戦なき世を慈しみ返り花

つっぱれどひとり寂し石榴爆ぜ

月光のまわす宇宙の万華鏡

一徹の胡座くずさず雪たるま

つぶやきの百を地に敷き百日紅

山中 頼子

クルミパンやいのやいのと角を出す

あたたかや耳の穴から欠伸でて

ひとひらはあそびせておく夕桜

大つびらに泣きついた日のポインセチア

洗い立てジーンズ動き出す五月

馬淵 津枝

諸家近詠

山崎 芳子

唐突の夫の旅立ち年果つる
冬の雷忽と安穩劈裂きて
胡蝶蘭カトレア哭くや喪正月
辿る世の杖は彼方へ寒に入る
生きなばや寒九の水を胸の洞

森 ふみ子

昆虫の目線でつまむ草苺
終戦忌紙鉄砲で済む平和
導きの彼の山遠し曼殊沙華
アナログの一人の世界冬仕度
残忍な仕業木の芽は裏切らぬ

村上千代美

晩秋のエチュード森が透けてくる
良夜なり音を絞ってベートーベン
風花に隠す望郷遠岬
紙皿に盛りだくさんの聖夜来る
樹の忘年そしてダンディー斜向かい

三苦 知夫

人の日や潮騒のごと鍛鉄音
左義長へ御神火が畦伝い来る
花万朶地酒酌みたきほど晴れて
水で割る火の国の酒月おぼろ
雨の日は雨の詩を詠む沈丁花

吉野 精

街に来て百合はネオンに疲れたる
おいリンゴ君の未来はジャムである
空のエースすべて直球流れ星
燕去る猫もいつしか消えていた
児の尿はオンザロックの霜柱

柳本 ゆみ

寒波来る開けたるままの猫の門
猿山の視線からまる初御空
低音から始まる歓喜冬木の芽
鉄路より拳がるランタン冬の旅
一升餅背負うスカート冬うらら

山中とみ子

冬深し焼くほど塩を吹く魚
翔つ鳥の影が障子に福寿草
爪切りの音が弾ける寒日和
福寿草湯気に吸いつく碗の蓋
笑い皺一本ふやし初鏡

森 美樹

青蜥蜴走るやアイデアが閃めく
初夢に亡夫来る髭の伸び放題
超元氣ステンレス這うなめくじり
薄氷を踏めば慕情に火が付いた
クリオネが悲鳴をあげてゐる暖冬

横須賀洋子

鶏頭の良し悪しを突く庭の鳥
栗ご飯とうとう一人で平らげた
奴唄日暮れのギリシャ見ておりぬ
立春や最寄りの駅に待つという
花の芽を落してゆける漢かな

宮本美津江

星飛んでゆけ戦争が来ぬやうに
碇星上がる煩惱軽すぎて
待宵は退屈何に化けたるか
定型といふ天を突く冬小立
奈落とふ舞台の底の淑気かな

八木 邦夫

黄昏へ漕ぎ出す渡船秋の声
一刷けの雲へ鱷跳ぶ河口堰
雲へ投げ雲を引き寄せ鯨の糸
読初の或る朝虫になる話
仲麻呂の望郷のうた冬満月

松澤 伸佳

年用意気配を消せば幸せに
悩むことなし大寒の上質紙
子猿らの太鼓の稽古月今宵
丁寧な仕事が出来たかたつむり
耳裏痒し梅雨晴のオママゴト

森 章

薄氷に等高線の模様かな
たたまれて小舟のかたち紙風船
蛇腹式写真機藤の花ざかり
大根の花すきまだらけで明るくて
灯台の後ろ姿や鳥雲に

三浦 侃

冬服を捨てて飛び出すカラウエア
白梅の巫女は朱袴翻す
花種蒔く揚がるバルーン店開き
笑栗の縄文土偶胸豊か
誕生仏煌めきありて花御堂

山本 新

春昼やゆつくり動くものの影
ふるさとはいつもゆふぐれ浮いてこい
しばらくは秋風に揺れ恋の絵馬
寒星やまた読み返すゲバラ伝
ぼつぺんを吹き軍港の見える坂

諸家近歌

吉岡 一三

新しい切株のねじ鯨哭く
半球を瓶話にして冬夕焼
性として饒舌今日のシクラメン
寒の水西塔建立以前より
煮凝は骨閉じ込めるための嘘

矢野 忠男

青岬細胞さらに動き出す
襟足にソースの匂い万太郎忌
白南風や白き闇もつ突つばずれ
ラムネ抜くまだまだ来ないシャトルバス
退院許可二百二十日の風の中

三好美穂子

塩壺も妣の匂いか梅拾う
新涼の後悔もなき離岸流
木の香り近し冬待つ多喜二の碑
智恵子との空白檸檬の齧りたて
深秋の毀れる砂を掻き集め

股野 久子

宴果つ新樹の下の泣き笑ひ
初蟬を今日のページに記しけり
蟬の声唱和してゐる別れかな
八月尽人送ること多かりき
ハローウィン猫の着てゐる黒マント

三須 民恵

寒波予知項の奥が床づれる
藪柑子万の風には万の紅
カラカラと空白少しの紅梅
空耳か虫の告白日本語
秋の海後ろは見えない見たくない

山中 葛子

梨齧るなんと淋しい甘美かな
グロテスクな平和であるよ無患子よ
震災忌蝶のハンカチにくちずけ
おもわず咳おもわず許す純喫茶
官能のSLとゆく大花野

水戸 吐玉

花りんごひとり唄へばみな唄ひ
ごまかして笑ふ寂しささくら草
初さくらゆるゆると来て一万歩
挨拶をするだけの仲花なごり
ふらここや窪みに空の水たまり

松岡 節子

かけつこを速くと絵馬に三日かな
マリア像の見つづけるもの著莪の花
故郷の小さき直会洗鯉
河童棲む淵に鋤簾を浸し秋
ボサノバのばおばおばおと年暮るる

増田 元子

うとうとと狍犬はらはらと桜
足りないブレス薫風に八ツ当り
涼しさや古稀のピアスとすれ違う
純朴な滝と対峙す飛蚊症
手袋を脱ぐ神木を潜るとき

松下總一郎

菜の花の守りきれるや赤字線
己の子背負い市兵衛麦を踏む
無住寺や花三楹の雨模様
若布粥ちちはは超えし齡かな
雲雀圏越えてナイルを巡りけり

山菅 恵子

湯呑み置く持つ父の手を思いけり
五月雨や遺影の手前に父の居る
留守電に残りし父の声を聞く
化学式並ぶノートや父の文字
祭壇の花うつろいゆく五月晴れ

村田 珠子

枯蔓の空引つ張れば漠と母
秋思という埴輪の眼窩のようなもの
パリにテロ鳥食みこぼす実千両
母という無力なるもの浮いてこい
洗濯機へ放る体温花の冷え

山口 彩子

透明なことばのように小鳥来る
ごうごうと地の底炎ゆる十三夜
鯖街道目玉ばかりの鳥威し
人混みのかすかな敵意かわごろも
存念の一輪のいろ冬薔薇

水沼 幸子

千の私語のみこんで脱ぐ花衣
母の日の花東水に解き放つ
炎天の石濡れており百花園
蜻蛉に仔細ありけり火の匂い
空蟬の声聴く耳のない埴輪

村上 澄子

秋の風枯れないように誘いくる
父の忌や拳骨ほどの榎植の実
原点は男と女木の実降る
ふくらはぎ揉んでこの世の夏に入る
菜の花の上手にのせる口車

私の感銘句

森田 守啓

怪談の葛切りは誘われている
 深緑を潜りて蒼き雲に乗る
 馬の眸のどの眼のなかも青嶺
 おなじ方向むく怖さあり窓の花
 わたくしの頸を欲しがる藪椿
 後の世に辻もしあらば風船壳
 蟻々と連らなりやすき肢体もち
 鏡面に風の行き交う古代雛
 平がなはをみなの化身蝶よぎる
 人込みに私という水中花

作者名 号頁

菊地 京子 116 2
 小出 治重 116 3
 植原 安治 116 3
 椎名 鳳人 117 5
 清水 伶 117 5
 塩野谷 仁 117 5
 直江 裕子 118 2
 鈴木 郁子 118 4
 竹内 絵視 118 4
 高遠 朱音 118 4

大見 充子

幻聴のそのまま鳥になる雪夜
 言うなれば吾も蓑虫揺れており
 薫風を持ち帰るなら縄電車
 見てくれる筈ふらごを押しやる
 金輪際海星さびしきとき動く
 誰の罪真赤になれぬ赤蜻蛉
 すかんぼやあつげらかと飢えており
 カーテンを閉じれば哭いて雪岬
 消しゴムで消しても父の日肩車
 あの日から沖を見る癖いわし雲
 見てくれる筈ふらごを押しやる
 何と切ない句だろわか。ブランコに乗って
 たのが子供であれ大人であれ、天国から見て
 るに違いない。二人だけの想い出の中に。

市川 唯子 116 2
 國武 和子 116 2
 黒澤 雅代 116 2
 加藤 法子 116 3
 塩野谷 仁 117 5
 佐久間真城 117 6
 下村 洋子 118 3
 鈴木 郁子 118 4
 内藤 富雪 118 4
 保坂 末子 119 9
 加藤 法子

青木 一夫

風花の渚たとえば刹那という
 老人が問引かれそうに寒波くる
 目が覚めたところがこの世シクラメン
 この川の音より知らず糸とんぼ
 一通ずつ燃やす闇より火蛾生まる
 水にある眞昼の匂い著我の花
 心音の寒さあたりには杭を打つ
 実石榴や砲台一つ島にあり
 落葉掃く最終章という軽さ
 彼岸花折らねば前に進めない
 実石榴や砲台一つ島にあり

市川 唯子 116 2
 北野 耕太 116 3
 小林 雪枝 116 3
 片山 依子 117 5
 直江 裕子 118 2
 永井アイ子 118 2
 下村 洋子 118 3
 藤岡 尚子 119 9
 前田 孝子 119 11
 原 悦子 119 12
 藤岡 尚子

戦争の産物として島に一つが残っている。茂
 原市や富津市にも掩体壕や砲台が残っている。
 掩体壕とは零戦を隠してあつた跡で戦争体験者
 にとつては玉砕の島々、原爆、飢えと悲惨さだ
 けが残る跡、何げなく島に残っている砲台は戦
 争を後世に伝える以外の何ものでも無い、そば
 に石榴がカツと真つ赤な口を開いて悲惨な戦争
 への手掛りを伝えている。さり気なく作つたと
 ころに広がりが出ていて佳句。

椎名 鳳人

足腰にとつかり冬が棲みつつきぬ
 遠き潮騒十二月八日かな
 暗黒は焔のうしろ敗戦忌
 無神論唱う種無し葡萄熟れ
 フクシマとなりて幾とせ蛇穴を
 脇役で終る奴ではない清水
 死は一人愛は二人の夏木立
 蟻の列放射線上異常あり

小張 直子 116 2
 金田めぐみ 116 4
 鈴木美津子 118 2
 千葉 智司 118 2
 徳吉洋二郎 118 2
 田村 隆雄 118 4
 内藤 富雪 118 4
 林 阿愚林 119 9

電柱が男を繋ぐ秋出水

馬場 益江 119 10
 鳴戸 奈菜 119 12
 電柱が男を繋ぐ秋出水
 馬場 益江

日本中の人の目がテレビ画面に釘付けとなつ
 たあの茨城県常総市を水没させた鬼怒川の氾濫
 であるう。作者は当事者であるか否かは知る由
 もないが、あの電柱にしがついて濁流と闘い
 ながら必死に救助を待ち続けた一人の男性の心
 境は想像を絶するものがあつたであろう。しか
 も彼の忍耐力こそ、流される寸前の住宅からへ
 りで救出される何人もの命を救つたのである。
 一本の電柱、一人の男性の忍耐力、救助隊員の
 判断力に感動である。

坂本 正夫

失いしものの重さや流れ星
 あるがまま生きるよ決めてより涼し
 青田風健忘症は生き易し
 鳥居いくつくれば叶ふ春の恋
 あの日から沖を見る癖いわし雲
 観自在呆けるまで立つ葱坊主
 青葉谷ふと人消える駅がある
 冬めくや直線多き木々の影
 遠き着地父母のなき大刈田
 遅き日や君等の主語が行方不明
 観自在呆けるまで立つ葱坊主
 句柄に素直に魅せられる。句の描写力に深い
 感情が隠されている。読むにつれ、引き込まれ
 ては、惑わされる。それでいて俳諧味豊かな象
 徴詩。上五の観自在をどう把えるかは読み手に
 委ねられが、仏陀の法を自在に呆ける葱坊主か、

中村 棹舟 119 9
 長濱 聰子 119 9
 普川 洋 119 9
 藤岡 尚子 119 9
 保坂 末子 119 9
 細根 栗 119 10
 羽村美和子 119 10
 中村 直子 119 10
 藤田 富江 119 10
 並木 邑人 119 11
 細根 栗

それとも観世音を拝し、呆けるまでのそれか。作者には祈りの究極の姿なのかもしれない。そんな思いが読み手の心を豊かにし、かつ日本人の心の寄り拠を強く感じさせての余韻の泌み入る句。

戸邊 光一

もう誰のものにもならぬ鳳仙花	林 阿愚林	119 9
望の月ブランドピアノに艶布巾	長濱 聰子	119 9
解決をしないのも知恵ラムネ玉	普川 洋	119 9
あの日から沖を見る癖いわし雲	保坂 末子	119 9
先頭の健脚に蹴く熱風裡	馬場 益江	119 10
家訓などなし暗闇の鏡餅	半田 千枝	119 10
萩乱る御陣乗太鼓昂れば	檜垣 梧樓	119 10
この星に言語はいくつ鳥渡る	沼山美津江	119 11
万緑に呑みこまれたる大鳥居	前田 孝子	119 11
採血の菊一輪に昂ぶれり	野口 京子	119 12
家訓などなし暗闇の鏡餅	半田 千枝	119 12

昔から日本独特の鏡餅と言うものは、毎年正月に神棚や床の間、近年は玄関等に供えられ、五穀豊穡を感謝し、皆の安全や健康を祈る習慣がある。旧家になると鏡餅の飾り方等も示された家訓等あるようだが、ここには何も無い、暗闇のと表現することで作者がしっかり継続している思いはまさしく家訓であろう。省力するのは簡単だが、いつまでも残したい文化である。

中里 結

山積みワゴンの本に銀杏ふる	浪本 恵子	119 9
実石榴や砲台一つ島にあり	藤岡 尚子	119 9
終戦日砂の熱きを嘖みし爪	保坂 末子	119 9
茄子の花元気でまめな夫のゐて	藤井 遙	119 9

島ぢゆうの男が道に祭笛
津高里永子 119 10

戦跡の洞より湧き出て碧揚羽
羽村美和子 119 10

巻き揚げる網に砕ける後の月
半田 千枝 119 10

八朔の生れて三日の赤ん坊
西澤 繁子 119 11

誰もいない私もない公園の秋
鳴戸 奈菜 119 12

頬杖の鉾に影おく秋の暮
橋口 久子 119 12

誰もいない私もない公園の秋
鳴戸 奈菜

木々が色づいてすっかり秋らしくなった公園の、いつもの石に腰を下ろして、流れる水や鳥の声に耳を傾けていると、時の経つのも忘れてしまいたい気分になる。ベンチに居る老人も、元気にとび回る子供も、池の回りを歩いている人もいつの間にか視界から消えている。自分さえも意識しないでいられる―、そんな秋のひとつきを想う。

檜垣 梧樓

テイタイム終えて菊師の目に戻る	斉藤すず子	116 2
捨てに行く亡父の布団仏桑花	東 國人	116 3
娘の家の鶏の丸焼三日かな	棗 楯伊	117 5
一寸の草水柱にも日のしづく	笹沼 郁夫	117 6
妻というこの世の記憶とろろ汁	水野 禮子	117 16
蝸牛の渦の真ん中少し鬱	深山きんぎょ	117 16
うす甘き男ともだちラ・フランス	鈴木 瑩子	118 2
やみくもを直感といひ冬の滝	田口満代子	118 3
存うを信じて掬う秋の水	保坂 末子	119 9
梟のなきまねする人咳もする	なかもと淑子	119 12
存うを信じて掬う秋の水	保坂 末子	119 12

「存う」は「ながらう」(永らふ・長らふ・存ふ)のことであり、「ながらえる」の文語形)、「生きてこの世に長くどとまる」ことを意味す

る(ヤフー)また、「ながらふ」は「流らふ」でもあり「生き渡る」こととある。(岩波古語辞典) 作者は「生きてこの世に長くどとまること」、「生き渡ること」、すなわち自己存在の永續性を念じて、自然の秋の蕩々たる川の流れから両掌いっぱい水に水を掬いとるのである。

岡崎 翠

菜の花に立ってかけてある知恵袋	窪田 俊作	117 5
ばらばらに暮らして家族よもぎ餅	椎名 鳳人	117 5
うしろにもある青空と逃水と	塩野谷 仁	117 5
真つ先に布巾のかわくクロッカス	里見 さち	117 6
すすきかるかや其処までもこれまでも	千葉 信子	118 2
灯下親しいもオンなる電子辞書	高橋由紀子	118 2
よおーいドン春が一気に駆けてきた	島田 翠松	118 3
青空にシュートを決めて卒業子	前田 孝子	119 11
誰もいない私もない公園の秋	鳴戸 奈菜	119 12
運動会ひらがなだけの案内状	原 悦子	119 12
灯下親しいもオンなる電子辞書	高橋由紀子	119 12
三六五日私の手許に電子辞書がある。		
灯下親しいの句を拝見してまるで自分のことのように頬がゆるんだ。		

私の師は俳句は一人称であり、作品は分身であるから血を通わせなさいと言う。いつの間にか人肌感じられる電子辞書が愛おしい。「菜の花に立ってかけてある知恵袋」にも心ひかれた。

秀吟が多く充実した時間であった。

イザベル真央

春待つや二人心のひとり旅	太田 涼子	116 3
桃二つ寂しさ三つ置いてゆく	白木 暢子	117 6

できぬ決断キャベツ一枚つつはがす
 美しい卵が二つ冬の家
 高木 一恵 118 3
 中里 結 118 3
 長濱 聰子 119 9
 根岸 ナツ 119 9
 吾のみで終るこの家や柿熟るる
 藤岡 尚子 119 9
 醫院てふ看板そのまま青葉木菟
 馬場 益江 119 10
 喋りつつ写真をごみにする晩夏
 日向ほこ一ト日生きれば一ト日老ゆ
 林 紀之介 119 11
 美しい卵が二つ冬の家
 高木 一恵

ひとり暮しになつてからは、元旦は富士靈園
 の墓参から始まる。二日目は、ドライブがてら
 思い出がつまつた海の家を見に出かける。今は
 人に貸してある小さな家を遠くからながめなが
 ら農産物販売所で生みたての卵を買うのが、私
 のひそかな楽しみみのコースである。
 卵はパックに入っていないので、ひとつづつ
 紙に包んで大切に家に持ち帰る。何げない卵を
 美しいと思う心が俳句なのだろう。冬の家は暖
 かさと厳しさが同居している。

鈴木加寿子

無より出で有より無へと秋暮るる
 久保 筑峯 116 2
 初時雨平等という観覧車
 東 國人 116 3
 裂けた石榴に敗戦の日があつた
 北村 妍二 116 4
 時雨るる波の伊八の荒ら木彫り
 庄司とほる 117 5
 ゲルニカの牛にも涙沖繩忌
 鈴木美津子 118 2
 列島に火の山猛る敗戦忌
 高橋 節夫 118 3
 少しずつ西へのめつていくすき
 長濱 聰子 119 9
 秋桜終章に置くアンダンテ
 藤田 富江 119 10
 ひとつ反るはリルケの詩片冬薔薇
 平木智恵子 119 10
 遅き日や君等の主語が行方不明
 並木 邑人 119 11

ゲルニカの牛にも涙沖繩忌
 鈴木美津子
 「ゲルニカ」と言えばピカソ。空爆の犠牲となつた子供を抱く母親、狂い叫ぶ馬、逃げまどい苦しむ叫ぶ人々や動物、人間のような目を持つ闘牛の頭、幻滅、絶望の世界が描かれている。折しも「沖繩忌」が今年も廻ってきた。太平洋戦争の末期、日米の激戦地となつた沖繩、兵と島民十数万人が犠牲となつた。「ゲルニカ」と「沖繩」をダブらせて、心が痛む。この地球と言う星の平和を祈念してやまない。

保坂 末子

薫風を持ち帰るなら縄電車
 黒澤 雅代 116 2
 飛び石で繋がる本家夕蝟
 斉藤すず子 116 2
 雲雀落つ十中八九胸に落つ
 塩野谷 仁 117 5
 ばらばらに暮らして家族よもぎ餅
 椎名 鳳人 117 5
 木の芽風日本語という柔らかさ
 高橋 宗史 117 6
 真実を知りたし蟬の穴覗く
 千葉 智司 118 2
 かまきりを箒に乗せて移しけり
 田中 喜翔 118 3
 天上に句座あり花の隅田川
 鈴木 和子 118 3
 あるがまま生きると決めてより涼し
 長濱 聰子 119 9
 さよならの決定ボタン春寒し
 馬場 益江 119 10

山中 頼子

薫風を持ち帰るなら縄電車
 黒澤 雅代 116 2
 父も石母もまた石木菟が鳴く
 加藤 法子 116 3
 正論は何時も疎まれ懐手
 久保さちを 116 3
 後の世に辻もしあらば風船売
 塩野谷 仁 117 5
 軍艦なき軍港黒い春日傘
 重田 忠雄 117 6
 真実を知りたし蟬の穴覗く
 千葉 智司 118 2
 桜見る桜の風に抱かれて
 高橋富久江 118 3
 落ちゆくを抱き止められしだれ梅
 竹内 絵視 118 4

爛爛とひまわり畑のゴツホの目
 福田志津子 119 9
 落雪の地の怯えなり秘密法
 並木 邑人 119 11
 落雪の地の怯えなり秘密法
 並木 邑人
 安保関連法案や秘密保護法案など次々に国会に上程され成立していききました。私のような戦中派にとって限りなく不安な感じですよ。
 落雪という厳しい季節に安んず、秘密法成立がいつか来た道に向かうのではないかと不安を「怯え」と作者がとらえたことに共感します。
 拙ないけれども、句作を通して次世代をなう子供たちに平和な世の中を渡さねばと思う日々です。

久保 筑峯

九条の壊されそうに大寒波
 小野 功 116 4
 金輪際海星さびしきとき動く
 塩野谷 仁 117 5
 裸婦ともなれず寒椿ともなれず
 清水 伶 117 5
 九条は宇宙のおもさ天道虫
 重田 忠雄 117 6
 美しい卵が二つ冬の家
 高木 一恵 118 3
 失いしものの重さや流れ星
 中村 棹舟 119 9
 しばらくは生者の行進曼珠沙華
 保坂 末子 119 9
 天の声地の声木々の芽吹く声
 細根 栗 119 10
 憲法は死にますか今朝露を煮る
 並木 邑人 119 11
 桐の実のシユプレヒコル身の内に
 林 ゆみ 119 11
 失いしものの重さや流れ星
 中村 棹舟
 戦争や震災で沢山の身内を失った人の背後にあるのは、悲しく重い現実である。大切な人を失った悲しみはいかばかりだろう、と胸がつかまる思いである。アジア・太平洋戦争、阪神淡路大震災、東日本大震災での失われた命の重さ。命より重いものは無い。そして、再び戦火で尊

い命を失つてはならない。このことを忘れずに、
未来へと語り継ぐべきである。

菊地 京子

風花の渚たえば利那という 市川 唯子 116 2
 冬さくら母の化身でありしかな 小張 直子 116 2
 薫風を持ち帰るなら縄電車 黒澤 雅代 116 2
 水仙の湖の奥行計りかね 小池美佐子 117 5
 椿落つ海は軍艦連れてくる 窪田 俊作 117 5
 おぼろ夜の紅絹一反を思いけり 清水 伶 117 5
 金輪際海星さびしきとき動く 塩野谷 仁 117 5
 衰へを涼しさにして半跏趺坐 直江 裕子 118 2
 心音の寒きあたりに杭を打つ 下村 洋子 118 3
 芹摘んで先の人生変わるかも 半田 千枝 119 10

松本 静頭

水澄むや湖底に集落眠らせて 國武 和子 116 2
 飲み代に足が出てゐし円朝忌 池田 和人 116 3
 みちのくのしづもる海へ草矢うつ 高橋 由樹 116 15
 後の世に辻もしあらば風船売 塩野谷 仁 117 5
 作句とは老いのリハビリいわし雲 高橋由紀子 118 2
 終戦の日スプレー缶に穴あける 徳吉洋二郎 118 2
 父のこす軍刀に錆敗戦忌 高橋 節夫 118 3
 吾のみで終るこの家や柿熟るる 根岸 ナツ 119 9
 あの日から沖を見る癖いわし雲 保坂 末子 119 9
 茄子の花元気でまめな夫のゐて 藤井 遥 119 9

後の世に辻もしあらば風船売 塩野谷 仁
 老齢が進むにつれて人間は限りなく童心に還
 るという。若い頃は企業戦士のごとく身をけず
 るような激しい生存競争に堪え忍んできた。そ
 して、いつの間にか老い果て、ふと荒涼たる思

いに襲われるのは多くの高齢者の味わうところ
 であろう。そんな時、遠い昭和の路地裏でよく
 見かけた風船売りのことがふつふつと楽しい思
 い出としてよみがえる。飄々とした句柄がほの
 ぼのと心にひびく素晴らしい共感句である。

徳吉洋二郎

枯蟻螂目玉のおくに波頭 坂間 恒子 116 2
 荒神のまなこは故郷冬さくら 小林 実 116 2
 あといくつ穴掘れば足る花曇り 芝崎 梓 117 6
 美しい卵が二つ冬の家 高木 一恵 118 3
 怪談に致死量ありて雪女 高桑婦美子 118 4
 鱗雲あんちきしょうは何処にいろ 林 阿愚林 119 9
 あいつかも蟋蟀上り込んで鳴く 樋口 博徳 119 9
 仰向けの蟬蟬しぐれ聞いている 羽村美和子 119 10
 ジャンケンの相手が消えた八月 中村 冬美 119 11
 可愛いがる猫より化けて小春の日 野口 京子 119 12
 あいつかも蟋蟀上り込んで鳴く 樋口 博徳

玄関をあげたら目の前に蟋蟀、あの丸くて光
 沢ある頭、作者には一瞬何に見えたのだろうか、
 「あいつかも」は幼友達だろうか、それとも美
 しい声を聞いてかか愛しい人が浮かんだのか、
 それは作者にしか分からない。
 しかし作者の眼前に飛び込んだ景が数十年前
 の世界に引き戻してくれて、走馬灯のように思
 い出が流れたのであろう。蟋蟀をクローズアッ
 プしあいつかもこの想像は読者に委ねている。こ
 れこそが俳句の力、魅力である。

浜谷 徹

ゆく春をサンダル履きの街の角 高橋 健文 118 2

初夏やドレッシングを縦に振る 永井アイ子 118 2
 仲良しの背中合はせに菜花摘む 鈴木 房州 118 2
 貝塚の貝押し出して霜柱 田中 正恵 118 4
 父の忌の沖に向かへる蜻蛉かな 関 千賀子 118 4
 望の月グラントピアノに艶布巾 長濱 聰子 119 9
 醫院てふ看板そのまま青葉木菟 藤岡 尚子 119 9
 島ぢゆうの男が道に祭笛 津高里永子 119 10
 議事堂を囲むデモ隊天高し 林 紀之介 119 11
 樹木医の幹蔽く音秋日和 保坂ミエ子 119 11
 父の忌の沖に向かへる蜻蛉かな 関 千賀子

鎮魂の抒情句に感銘した。父の忌は遺影に捧
 げる情愛である。そして沖に向かへる蜻蛉は具
 象の景。情と景の対比は俳句の真髓で、その空
 間に思いを巡らすことができた。蜻蛉が沖に飛
 ぶ中七以下は死生観であろう。父の武士道を蜻
 蛉に託したのか、あるいは遺影に心情を語って
 いるのか、判断は読み手に委ねている。祖国の
 妻子への愛を抱きながら散った特攻隊の遺志を
 連想する鎮魂句である。情を景に委ねる情景の
 句を大切にしたい。

竹内 絵視

馬の眸のどの眼のなかも青嶺 植原 安治 116 3
 山眠る眠らぬ鳥を懐に 金子 敏 116 4
 地の温み背負ひて出づる藪の臺 菅野三重子 117 5
 見えぬ壁崩す槌欲し冬銀河 佐藤 映二 117 6
 木の芽風日本語という柔らかさ 高橋 宗史 117 6
 蟻地獄覗く幼の目が熱い 椿 良松 118 2
 桜葉降る七十年の海の底 佐藤 鈴子 118 3
 人込みに私という水中花 高遠 朱音 118 4
 あるがまま生きると決めてより涼し 長濱 聰子 119 9
 風薫る死ねば詩人になれそうな 普川 洋 119 9

蟻地獄覗く幼の目が熱い 椿 良松

幼児にとつて始めて目にする蟻地獄、勿論対照の天国も知る由もないが、その蟻群の混合沸騰の熱気は大人の先入観の蟻地獄とは異なつた生命の混合燃焼の計り知れぬ熱線を予告する如く未知をかいま見せ高度な熱量の確かなものへの震動を予知する、普通の大人の眼には読み取れぬ生命の源の熱量をこの先入観のない幼の目に捉えられた命のマグマでもあるのだ。

重田 忠雄

こおるぎを暗夜行路に誘いこむ 菊地 京子 116 2
曲がつている鉄筋憲法記念の日 東 國人 116 3
論談のやがて暴論隙間風 窪田 俊作 117 5
裸婦ともなれず寒椿ともなれず 清水 伶 117 5
うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5
切り干の大根すでに訛りたる 下村 洋子 118 3
羽抜鶏金網にあるうらおもて 高野 春子 118 3
聖五月わたしにメタリックな睡り 高野 礼子 118 4
天の声地の声木々の芽吹く声 細根 栗 119 10
遠き着地父母のなき大刈田 藤田 富江 119 10

曲がつている鉄筋憲法記念の日 東 國人

東京オリピック競技場のデザインが話題になつた。コンクリート構造物を可能にするのは、鉄筋の張力とコンクリートの圧力の長所を組合せた複合材料である。直線に曲線を取り入れたビルが増えてきている。これを可能にするのは鉄のやわらかさ、加工性である。

工事現場の曲がつた鉄筋を見て、出来上がるビルが頭にかぶ。今の問題として憲法を考える日であり、単なる休日ではないのである。

東 國人

粹に生き粹に逝きたる夏の蝶 久保 筑峯 116 2
日体大卒のごきぶり現わるる 國分 三徳 116 2
裂けた石榴に敗戦の日があつた 北村 妍二 116 4
駅員の白き手袋東風を指す 笹沼 郁夫 117 6
蝸牛の渦の真ん中少し鬱 深山きんぎょ 117 16
グレープフルーツ理不尽をまっぶつたつ 鈴木 瑩子 118 2
少しづつ西へのめつていくすすき 長濱 聰子 119 9
あの日から沖を見る癖いわし雲 保坂 末子 119 9
遅き日や君等の主語が行方不明 並木 邑人 119 11
酔ふほどにあれあれあれ秋の夜 大坂 吉也 119 13
日体大卒のごきぶり現わるる 國分 三徳

日体大には、「集団行動」という伝統行事がある。何十人という学生が、集団で一糸乱れぬ動きで、縦横斜めに動いたり、止まったり連続して行うものである。そして、ごきぶりの動きも、真つ直ぐ行つては止まり、急に横や後ろに動いたりと大変機敏である。作者は、そのごきぶりの動きから、日体大の「集団行動」をイメージしたのだろう。ごきぶりと日体大、この意表を突く二物の取り合わせが、大変面白い一句である。

小林 俊子

セーターのさみしさ海に呼ばれてる 市川 唯子 116 2
木枯が残していったフランスパン 川上 典子 116 4
風花や声降りて来る滑り台 金子 敏 116 4
椿落つ海は軍艦連れてくる 窪田 俊作 117 5
おなじ方向むく怖さあり葱の花 椎名 鳳人 117 5
桃二つ寂しさ三つ置いてゆく 白木 暢子 117 6
尻餅の大きな窪み雪おんな 佐藤 鈴子 118 3
動かねば崩れる象や花の雲 関 千賀子 118 4

あの日から沖を見る癖いわし雲 保坂 末子 119 9
静けさの先に広がる草紅葉 橋口 久子 119 12

原島 典子

椿落つ海は軍艦連れてくる 窪田 俊作 117 5
わたくしの頸を欲しがる藪椿 清水 伶 117 5
鼻が真うしろをみる日暮あり 佐々木幸子 117 6
冬の雲眩しき方へ球返す 佐藤 禎子 117 6
グレープフルーツ理不尽をまっぶつたつ 鈴木 瑩子 118 2
ひまわりの黄色絞つて登校日 高遠 朱音 118 4
鯛雲あんちきしょうは何処にいろ とべバツタ地球という星危ないぞ 林 阿愚林 119 9
柀や涙の痕あり聖母像 藤田 富江 119 10
遅き日や君等の主語が行方不明 半田 千枝 119 10
遅き日や君等の主語が行方不明 並木 邑人 119 11

國分 三徳

始祖鳥に似たものを食べ年忘れ 小林 実 116 2
ひとり身に門限はなし日脚伸ぶ 國武 和子 116 2
目黒にはさして用なし初秋刀魚 池田 和人 116 3
大僧正生姜の匂いしていたり 植原 安治 116 3
うららかやここで休めと石がある 小林 雪枝 116 3
目が覚めたところがこの世シラメン 小林 雪枝 116 3
うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5
猫の目の隙だらけなり冬日向 佐藤美紀江 117 6
鯛雲あんちきしょうは何処にいろ 林 阿愚林 119 9
登山口塞ぎ山ごと冬眠す 長濱 聰子 119 9
うららかやここで休めと石がある 小林 雪枝
難しい言葉、表現を使わずとも簡単に、この石の存在を言い得ている。ここではこの石と季語うららかの相性がびつたりである。
作者のこの切り口は見事である。

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二二一回 平成二十七年十月十三日(火)

司会 小林 実

おいリンゴ君の未来はジャムである
 仏像を拝みたくなる朝紅葉
 鯛雲あんちきしょうは何処だろう
 花芒すつくと坂田藤十郎
 雨多き国となりけり木の実落つ
 虚栗から十方へニュートリノ
 官能のSLとゆく大花野
 元気かところんとあたる椎の実の
 いわしくも空似の人の通り過ぐ
 秋空やゴジラの愛の七十年
 赤とんぼ人差し指は墓標なり
 地下道より人湧き上がる神無月
 鷺群れてウエストサイド・ストーリー
 上半身以下を略しぬおどろかし
 鐘が鳴るさんま祭りの御都合で
 栗ご飯とうとうひとりて平らげた
 渡し舟大きく揺るる秋の天
 鈴虫の曲がるとき鈴振りくれし
 こぼれ萩傘傾げゆくところまで
 熟睡のかすかな破綻姫こおろぎ
 秋の蚊の己が頬打つ匙加減
 花芒ひたすら若い息づかい

吉野 精
 金子 未完
 林 阿愚林
 岡田 淑子
 大塚 弘毅
 榎垣 梧樓
 山中 葛子
 白木 暢子
 イザベル真央
 大畑 等
 徳吉洋二郎
 前島きんや
 楠見 恵子
 後藤 章
 小林 実
 横須賀洋子
 深山きんぎょ
 佐藤 晏行
 股野 久子
 池田 博臣
 村上 澄子
 なかもと淑子

●第二二二回 平成二十七年十一月十日(火)
 司会 榎垣 梧樓
 五円玉の唯我独尊みなし栗
 温水のプールとろりと蟻になる

池田 博臣
 楠見 恵子

落葉踏む音の青さよ同窓会

色褪せたラガーシャツ今日も脱がぬ爺
 まんまるい老人の椅子小鳥来る
 波色の石授かりぬ秋の暮れ
 鳥渡るうんと幸せ言うために
 もず日和うしろ歩きの方歩計
 阿国らは踊りて過ぐや新走
 寒雷や軍港のぞむ独身寮
 茶の花や明治の母の座りだこ
 律柿を剥くや子規それ喰ひけり
 海鳥の千切れて飛ぶも今朝の冬
 墓守るだけの産土こぼれ萩
 長生きもまんざらじゃない十一月
 残り柿さらってゆきし火星人
 白菊に囲まる仏笑みたたへ
 ふつと産道千本鳥居の時雨傘
 今年米塩むすびして宴果つ
 三本の橋潜りけり荻の風

前島きんや
 なかもと淑子
 山中 葛子
 横須賀洋子
 林 阿愚林
 岡田 淑子
 榎垣 梧樓
 佐藤 晏行
 村上 澄子
 後藤 章
 小林 実
 徳吉洋二郎
 金子 未完
 吉野 精
 大塚 弘毅
 大畑 等
 股野 久子
 深山きんぎょ

●第二二三回 平成二十七年十二月八日(火)

司会 イザベル真央

鯛焼のしあわせといふ重さかな
 小春日や努力の要らぬ恋をする
 十二月八日届かぬ杭あまた
 房総の水仙掬のような列
 故郷を追われ落葉は歌舞伎町
 どうやって死んでいこうか大かぼちゃ
 大枯野水道管が一本
 年用意妻の面影さがしつづ
 星の抱影猫の次郎やクリスマス
 冬座敷ドスンでんぐり返しかな
 国宝の虎と目の会う紅葉狩

深山きんぎょ
 林 阿愚林
 徳吉洋二郎
 小林 実
 吉野 精
 イザベル真央
 楠見 恵子
 大塚 弘毅
 後藤 章
 前島きんや
 村上 澄子

開戦日眩し過ぎるイルミネーション

葉牡丹とキャベツの格差ヨーロッパ
 丁寧な別れに二ツ柿の艶
 冬薔薇の黄色を選び願うごと
 諦念の紡ぐ長寿やつわの花
 夢にもみた棚田の米を買う時雨
 老年紅葉すトルストイにはなれないが
 勝鬃橋万歳はせず開戦日
 冬薔薇息をすること忘れけり
 落葉掃きすみしばかりへ尾長猫

金子 未完
 岡田 淑子
 横須賀洋子
 なかもと淑子
 池田 博臣
 大畑 等
 榎垣 梧樓
 佐藤 晏行
 白木 暢子
 股野 久子

●第二二四回 平成二十八年一月十二日(火)

司会 佐藤 晏行

揺れやまぬ初湯の中の足二本
 一人より一匹がいい枯野かな
 初夢やいつも通りに目が覚める
 路地に汽車響いて冬の金魚かな
 群衆の一人になるぞ早四日
 暖冬ですゆつくり戻つてきませんか
 帰り花どこか似ている私たち
 硝煙のはるかな匂い風花す
 おもわず咳おもわず許す純喫茶
 日の丸と丹頂鶴の頭かな
 冬日向子猿の尻のハート形
 切通し抜ければ小春日和かな
 冬ぬくし駅のテラスへ音楽隊
 松過ぎて鯨の干物とゆめびりか
 新橋の鴉鳴き出す二日はや
 マイナパーまことに冬の長さかな
 手毬つくスローライフとは良き御言葉
 大荷物持ちて戸口の雪女郎
 鱈酒やほのお儀式めくおかしみ

後藤 章
 林 阿愚林
 白木 暢子
 小林 実
 イザベル真央
 横須賀洋子
 楠見 恵子
 池田 博臣
 山中 葛子
 岡田 淑子
 前島きんや
 榎垣 梧樓
 股野 久子
 村上 澄子
 徳吉洋二郎
 吉野 精
 金子 未完
 深山きんぎょ
 なかもと淑子

迷彩服のやまとんちゆの猿回し 佐藤 晏行
冬ぬくし料理もすぐに腐りけり 大塚 弘毅

青葉研究句会報告

(於：千葉市文化センター・第五会議室)

●第五十二回 (平成二十七年十月二十二日)

司会 芝崎 梓

糸瓜忌の舌を使つて切手貼る 芝崎 梓
鴟の贅お裾分けだと言われても 加藤 法子
鯨髭切れば天変地異鈍る 並木 邑人
紅葉の盛り靴紐結べない 三須 民恵
たましいを入れて完璧菊師の目 椿 良松
色かえぬ松晩年はモノクロ 細根 栞
尾のありし因縁猫じゃらし痒し 細野 一敏
ふと余生頭に出でし藪枯らし 大塚 弘毅
早生蜜柑剥く指先の存在感 山崎 幸子
三人の補習授業や金木犀 鈴木まんぼう
激動の不惑はるかや今日の月 長濱 聰子
さんま黒目延命治療の話など 徳吉洋二郎
豊の秋辻の稲荷は正一位 矢野 忠男
落葉しきり次の出番が控えてる 石井紀美子

●第五十三回 (平成二十七年十一月二十六日)

司会 加藤 法子

夫よりも生き逆光の花野道 長濱 聰子
指先のとんぼの重みニユートリノ 徳吉洋二郎
地団駄を踏んで枯野に同化する 細野 一敏
アメリカが見えてるなり青鷹 小林 実
眼裏の白臍と同じ闇 椿 良松
今でなく逝く日の話青木の実 鈴木まんぼう
神に近づき冬眠の亀の嵩 芝崎 梓
カーディガンあいつの棘にかけておく 並木 邑人

熟成の目覚めグラスに冬銀河 石井紀美子
腰間の秋水走る如く冬 矢野 忠男
冬来たるゴーストライターと確信 三須 民恵
外道ゆく国際テロの狂い花 小高 稔
医者通ひ頭を下げて風邪貰ふ 大塚 弘毅
物忘れ堂堂根深汁旨し 加藤 法子
人生の途中ひひらぎの花にほふ 山崎 幸子

●第五十四回 (平成二十七年十二月二十四日)

司会 徳吉洋二郎

戦争へ届かぬように落葉掃く 芝崎 梓
男らのひそひそ話ぶぐに肝 徳吉洋二郎
十二月八日昭和の燃えぬゴミ 細根 栞
彼の世から覗いた此の世べつたら漬 細野 一敏
冬銀河だれかのためにピアノ鳴る 石井紀美子
鯛焼の鯛であること自信あり 鈴木まんぼう
春物の商いに儲け十二月 小高 稔
寒夜かな旧知のようにある手摺り 加藤 法子
冬タンポポちいちいの森の楽団 三須 民恵
凍蝶に凍蝶の添ふ陽の底に 山崎 幸子
Yシャツの禁欲なじり夕霧忌 並木 邑人
鐘一打水場すべてに蟬水 矢野 忠男
年男密かに欲しき勦斗雲 大塚 弘毅
冬銀河乖離の果ての白い時間 長濱 聰子
山眠る菓の力借りずとも 椿 良松

●第五十五回 (平成二十八年一月二十八日)

司会 大塚 弘毅

ひとし逝く葛爛酒置いてゆく 矢野 忠男
粕汁やヒトシは雲の釣り場に居る 並木 邑人
鎮魂へ冬のたんぼぼ加速する 芝崎 梓
寒に入る目玉の青き一夜干 長濱 聰子

柏研究句会報告

(於：柏市「南柏カフエ・ラナイ」2階)

●第四十二回 (平成二十七年十一月十四日)

司会 佐藤 鈴子

チエロ弾きの少年の名「奏」次郎柿 伊ザベル真央
冬はじめついに転んでしまったの 野口 京子
水鏡の鯉になってゆく鯉 長井 寛
なぐさまぬ掌を隠したり烏瓜 大畑 等
小春日や子守歌なる望郷詩 高橋 宗史
小春の象妊娠同志鼻同士 佐藤 鈴子
火の鳥を匿していたり紅葉山 下村 洋子
風呂吹きやポツリと母のひとり言 栃木 きよ

●第四十三回 (平成二十七年十二月十二日)

司会 栃木 きよ

一人用炬燵に痒いメロスの足 大畑 等
遊星の真ん中に居る浮寝鳥 長井 寛
日の当たる枯野に枯木枯人形 岡田 春人
冬ざれや尻に届かぬ象の鼻 小林 実

梢コナの葉の縮む月日よ京しぐれ
 着飾ツクリって女の唇舌クハシにある寒さ
 老いて多忙タマシや置き去りの毛糸玉
 柚子ジャムの透けるトースト小鳥来る
 ストープの揺らぐ代官山の本屋
 晩年や隙間に嵌める白き息
 伊藤 希眸
 小張 直子
 野口 京子
 佐藤 鈴子
 イザベル真央
 栃木 きよ

●第四十四回（平成二十八年一月九日）

司会 栃木 きよ

手毬唄未だに見えぬ着地点
 寒月光ほろう質につつまれり
 鶏捌く女バツハを弾く男
 餅焼いて百人一首音読す
 蹂躪ソロソロも躑躅ツツジも儘麦一寸
 蠟梅ロウバイやかの世のスター原節子
 少年の美しき喉元寒の水
 栃木 きよ
 下村 洋子
 松澤 龍一
 小林 俊子
 長井 寛
 佐藤 鈴子
 岡田 春人

新会員・会友紹介

市原市 小多田コタダ文子（会員）

（推薦者 武田 和郎）

ふらここを漕がずに語るふたりかな
 濡れ縁に闇を引き寄せ梅雨深し
 迎火ムカヒやあの世この世を通りゃんせ

市川市八幡 大木 明子（会員）

（推薦者 後藤 明）

パン種パンコのよく膨らめる小春かな
 葦アシ枯れて海鳥しげく騒ぐ日よ
 雪晴の朝に訪ひたき墓カネであり

ひろば

■第三十六回四街道市民文化祭俳句大会

日時 平成二十七年十一月八日
 会場 四街道市文化センター

源流主宰賞

母と子の老いにはふれず霧の中 海老沼季衣
 市長賞

わだかまり砕けば塵や秋の天 望月 麗子
 議長賞

踏まれつつ命いのち尽さむ草紅葉 浅見美代子
 教育長賞

今の世の闇を深むるすがれ虫 下田 力
 農業協同組合長賞

明るさを包む銀杏のベンチかな 塚田恵美子
 商工会長賞

外と国や溢るゝ難民冬どなり 西村 峰子
 第七位

開拓の大地残れり秋夕日 齋藤 溥子
 第八位

秋風や書かねば言葉消え去りて 中村久仁子
 第九位

老老の一つの秋を惜しみけり 台野 弘昭
 第十位

古傷ふるきずに纏わり付きし夜寒かな 池田 幸
 （小出治重報）

図書紹介

■句集『風の宿』 政成 一行

平成二十七年十一月二十八日 沖積舎
 俺は風 おまえは何だと 風の問う
 風の意味変える軌跡の 震後の蝶
 ひとときのとどまりどころ 風の宿

《会員・会友の近況》

・「優しさは風に染まりし草葵」
 句友葵さんが黄泉に旅立ちお子様方が「母は怒った事がない」と言った事が忘れられませんか。本当に優しかった人です。その人を詠んでみました。（宮下 奈緒）

・この一年余り膝を痛めてからは、吟行の参加も儘ならずにおりますが、俳句する心を失わずに過したいと思っております。これからよろしくお願ひ致します。（森 孝子）
 ・体調は特に問題なく、句会、教室等で多忙を極めております。主宰誌「響焰」は平成三十年には創刊六十周年を迎えます。（山崎 聰）

・昨年一月より千葉市の「女性センター」におきまして「清流句会」が始まりまして、楽しく参加させて頂いてをります。（山口 梅子）
 ・永年苦楽を共にした仲間の何人かが高令や病氣故に離れて行き寂しい限りです。幸い私は健康に恵まれ、四季の営みを体感できる田舎暮らしなので進歩しない俳句ですが、野菜作りと共に一生の伴侶として残り少ない人生を生きたいと思うこの頃です。（山中 頼子）

・近隣に住む孫六人から、活力をもらいつつ作句に励んでおります。（柳本 ゆみ）
 ・姉の介護が始まり忙しいのですが、俳句はとても楽しいので、がんばって作っております。（森 美樹）
 ・この年で初孫が生まれ（只今三ヶ月）体中が悲鳴を上げております。特に頭の空白に

はお手上げです。(三須 民恵)

・一月九日、愛犬にとびつかれて右手首を骨折。ようやく字が書けるようになりました。

(山中 葛子)

・春を先取りした句をならべましたが、できるだけ優しい句を句帳から引き抜きました。病の妻に昨年先立たれ、いまは一人暮らしですが三月には子供家族が引越してきます。(水戸 吐玉)

・仕事とボランティアに駆けぬけてきた。心の糧としてきた短歌「草笛」Ⅱを一月二十三日米寿の誕生日に上梓。(松下總一郎)
・昨年体を壊して遂に指定難病になってしまいました。只今休職中です。(山菅 恵子)

掲示板

《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 太田洋子、大畑 等

● 退会 (会員) 菅野三重子、渡辺礼子、山村則子、及川洋平、白本未知、みちのくたろう、山村自游、福田柁子、吉田悦花

(会友) 水村魚愁

● 移転 (会員) 中山皓雪 (船橋市金堀町へ 地区内移転)

△平成二十七年第四回幹事会△

日時 平成二十七年十一月二十四日(火)

午後六時より

場所 千葉市プラザ菜の花

■ 総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせした通り

三月二十日(日)に千葉市文化センターに於いて総会・俳句大会が開催されます。

総会 十時半開催

俳句大会 十三時より(席題発表は十時)是非ご参加下さい。

議題

- 一、三十五周年記念俳句大会の結果について
- 二、平成二十八年年度俳句大会・作品募集について
- 三、第一一九号会報について
- 四、現代俳句協会(本部)の動向について
- 五、平成二十八年年度春の吟行会について
- 六、各研究句会の状況について
- 七、その他

△平成二十八年第一回幹事会△

日時 平成二十八年一月二十六日(火)

午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、千葉県現代俳句協会の当面の運営について
- 二、平成二十八年年度総会・俳句大会・懇親会(三月二十日)について
- 三、平成二十八年年度総会資料について
- 四、俳句大会応募句の経過報告
- 五、第一二〇号会報について

- 六、平成二十八年年度春の吟行会について
- 七、今年度の企画・活動について
- 八、現代俳句協会(本部)の動向について
- 九、役員改選について
- 十、その他

□ 事務局・編集部だより □

● 平成二十八年年度総会・俳句大会は上記の通りです。奮ってご参加ください

● 四月二十九日(祝)に春の吟行会を開催します。舞台は船橋。文学散歩(太宰治)を行います。

なお今回は船橋市街地で食べ物屋さん多く、昼食は各自でして頂きます。句会場の昼食も可です。(アルコールは不可)
● 今号は大畑会長の追悼号として1頁に追悼文、2頁に追悼句の特集を組みました。

現代俳句千葉 第一二〇号

平成二十八年二月二十九日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長代行 秋尾 敏

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田六六五番地 松澤 龍一

千葉県現代俳句協会事務局

〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 高木 一恵

電話 〇四七-四四七-二九一二

FAX 〇四七-四五七-二九七二

電話 〇四七-四四七-二九一二

FAX 〇四七-四五七-二九七二